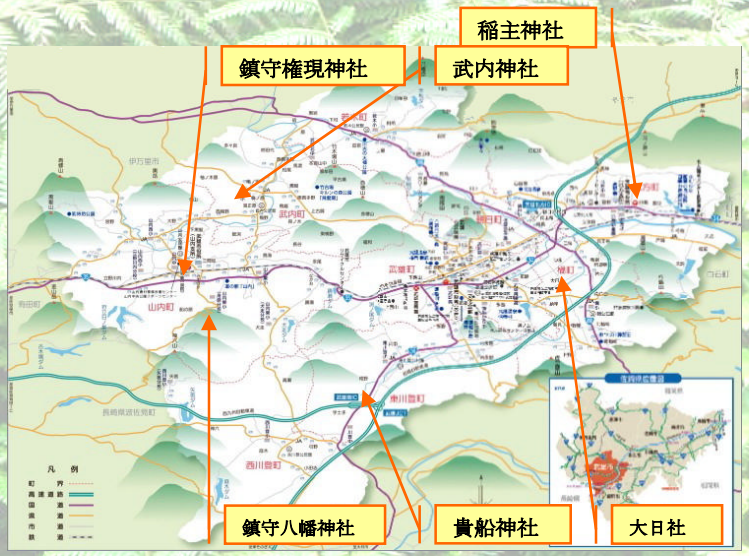
感動をあなたへ

武雄市重要無形民俗文化財

かんこ踊
真手野の舞浮立
大日の皮浮立
志久七囃子浮立
袴野面浮立
三間坂の荒踊



武雄市教育委員会

佐賀県重要無形民俗文化財
かんこ踊

奉納：９月 23 日（秋分の日）
山内町船の原　鎮守八幡神社

踊りの起源については一説によると、壇ノ浦の戦いで源平合戦が終わった後、平氏一門は分散し、平維盛の子六之助を初めとする一団が正治二年（1200）に武雄に流れ着きました。武雄領主後藤常明は、これを船の原に住まわせました。彼らは京で習い覚えた踊りを踊って無聊を慰め、酔えば「かんこかんこ」と踊ったのが始まりとされます。

衣装や所作、円陣を組むなど、荒踊に共通するところが多く、荒踊の祖形とも推測されています・

踊り手は 2 名ずつの先モッショ・後モッショと 20 名前後のカキからなり、「かんぱん」とよばれる上衣を着、化粧前垂れをつけ、黒脚絆に白足袋、わらじ履き、頭に烏帽子を被り、腰に１刀を差します。笛・鉦・地囃子にあわせた道行の後、本踊では先モッショ踊りのあと後モッショ踊りとなります。力強い腕鉾と踏み足、軽快な所作や雨乞い的な歌詞に特徴があります。

上：道行
中：
下：

佐賀県重要無形民俗文化財
真手野の舞浮立

奉納：４月第１日曜日（６年毎）
武内町真手野　武内神社

踊りの起源については、平家の落人を武雄領主がこの地に住まわせ、きらびやかな衣装で雨乞いなどに奉納したのが始まりとされます。その後、江戸時代に領主鍋島茂明が江戸参勤の際に見た三州岡崎の芸能を取り入れて完成したと伝えられています。

舞浮立は佐賀県西部を中心に分布する民俗芸能で、笛・鉦・モリャーシ（締太鼓）の伴奏に合わせ、舞いながら大太鼓を打つ浮立で、大太鼓は神の化身とされます。このため舞人は大太鼓に対し、短い撥で正面から、しかも大太鼓の頂天よりも低い姿勢で向き合います。太鼓がかりの姿勢と呼ばれ、神への敬意を表しています。

また、舞人は芸の初めに大太鼓の四隅を浄めてから舞うのも大太鼓に宿った神への敬意の表れです。

演目は、神への祈りの芸である御神を最初に舞い、恵比寿大黒・鬼といった狂言浮立や宮城野・義経千本桜といった歌舞伎や浄瑠璃を取り入れた浮立など慰安や娯楽の要素をもった演目など 33 囃子が残されています。

上：１本綾
中：義経千本桜
下：恵比寿大黒

武雄市重要無形民俗文化財

大日の皮浮立

奉納：７月 28 日
橘町大日　大日社

皮浮立は大小の太鼓を主体とする芸能です。笛・ﾓﾘｬｰｼ(締太鼓)・鼓・大胴の楽器があり、10 人前後で演奏されます。

大日の皮浮立は、リズミカルでテンポも速く、きびきびとした男性的な魅力があり、リード役が笛から大太鼓、大胴そして笛へと移動する特色があり、変化の妙をみせます。また、ﾓﾘｬｰｼの撥さばきには出色の冴えがあり、迫力があります。

当日大日社では祭の準備がなされ、大日如来の前には菰で編んだ花瓶に花がそえられ、境内には茅の輪が飾られます。夜、鉦浮立の合図で人々が集まります。子供による皮浮立、婦人による皮浮立、大人の皮浮立と和やかな雰囲気の中で奉納されます。

武雄市重要無形民俗文化財

志久七囃子浮立

奉納：10 月 19 日に近い日曜日
北方町志久　稲主神社

志久七囃子浮立は三笠鉾七囃子浮立ともいい、嘉禎元年(1235)に創建されたという稲主神社に毎年奉納されてきたものです。

この浮立は農民が演じる芸能で、演目が 7 曲あるところから七囃子浮立とよばれます。演目は三番叟・鳥さし・ひーやち・銭太鼓・綾竹・花笠・赤熊で、囃子に合わせて子供たちが踊ります。

関連する伝説として、「十三塚　赤い飯の悲劇」があります。

鎌倉時代の初め京を追われた源頼茂が７人の子供と志久で貧しく暮らしていました。ある日、赤い飯といって子供に食べさせたエビをその頃里で起きた紅稲の盗難者と間違えられたので、子供の腹を切って無罪を証明し、自らも切腹しました。7 人の子供に因んだ踊りで、父子の霊を慰めるものです。

武雄市重要無形民俗文化財

袴野面浮立

奉納：９月 23 日（秋分の日）
東川登町袴野　貴船神社

面浮立の起源は、戦国時代に肥前に攻めてきた敵を鬼の面をつけた奇襲で打ち破り、その出で立ちで戦勝祝いを踊ったのが始まりという説があります。しかし、本来は雨乞いや悪魔を払い禍を去り、福を招き五穀豊饒、家内安全を祈念する踊りと考えられます。

袴野の面浮立は明治 39 年に習得し、風願成就として奉納されています。

道行きの後、ささらを持った親面を先頭に鳥居をくぐって踏込み、境内では 3 列縦隊の隊形を整えます。親面の合図で笛・鉦・大太鼓の伴奏に合わせて腹部につけたﾓﾘｬｰｼを打ちながら、上下の躍動を中心とした力強い踊りをみせてくれます。

奉納は毎年されますが、大人の奉納は西暦の奇数年で、隔年奉納となっています。

武雄市重要無形民俗文化財

三間坂の荒踊

奉納：９月 23 日（秋分の日）
山内町三間坂　鎮守権現神社

荒踊は旧武雄領内に伝承される芸能で、享禄３年(1530)に島原の有馬氏が武雄の後藤氏を攻めた時、武雄勢が夜襲で打ち破り、戦勝祝いに足軽が即興的に踊ったのが始まりといわれています。

三間坂の荒踊は、モッショとカキとよばれる踊り手と笛・鉦・ﾓﾘｬｰｼの囃子方、謡い手で構成されます。基本的には国指定の「武雄の荒踊」と共通しています。

境内一杯にカキが円陣を作り、先モッショ二人が中央に出てきて全体の指揮をとります。先モッショは円陣の内側を大きく踊りながら回ります。この動きを後モッショと交互に行います。

腕鉾や両手をしなやかに大きく上下させて踊り、中央に戻ってきめをとります。退場に際しては、後モッショが最後列に位置し、後ろを見せない格好で退場していきます。